

●高澤良一 第八句集 随笑

●一月―三月

せきれいの尾をうち振れば来る年か

年迎ふ空万全を期すごとし

藟の実の数ほど福が来ればいい

初湯浴ぶ熱きは痒きことと知る

正月の風に当りに出で三歩

初雀羽音を残し消えてをり

嘴はしぶと太鴉と明日の見えない年迎ふ

初湯して考えごとは何だっけ

歳旦吟大き活字で無難なり

回顧詠ばかりに尽きぬ歳旦吟

初湯浴ぶからすの行水始めなり

寿げる墨の光沢年賀状

鷹揚に年を迎へて送るのみ

初夢のマンボウ何と豊大

初夢の途中駄目だと思ひけり

初山河大いに羽根を伸ばしけり

一張羅カシミヤセーター来て参拜

俳人諸新年号氏口を揃えて春の詠うた

歳旦吟それらしく詠む其処が駄目

今年もや句作言葉の砂金堀

初句会確かむ紙の裏おもて

慈姑食ひもう一波瀾ある世かも

松前漬先づ人参の歯当りよ

輪飾も既に六日の乾びやう

松過ぎの空を鳴らして風小僧

左義長の心棒燃えて炎々たり

火ひよつこ男おとこの踊れるごとくとんどの火

一遍像 凧に杖を進むる捨聖

鴛鴦は分に過ぎたる晴着被て
読みさして聴ける凧挿話めき
年明けの定年といふ大海原
亀のごと気長気儘に年過ごさむ
来ん年も雑事に力削がれまじ
走り根と一問一答初雀
行く方を定めず東風の吹ける道
初夢に昔のヨイトマケの唄
俳句莫迦ばかり集り初句会
漁始めインターネットてふ海に
円空の出遁読み初め「畸人伝」
年頭の雲一つなき美濃に入る
美濃紙の美濃を雪降る頃訪ふて
美濃衆と駅で落合ひ初吟行
美濃柿の蒂ばかりなる旅の空
宿木に飛雪張りつく峠越え
白樺の生の色しかと雪中に
雪原庄川においてきぼりのごと一戸
檜より檜に落つる谿の雪
太注連の形なりに波打ち積もる雪
凍み柿に楊枝が程の針氷柱
弾き初めに瞽女もたらせしおけさ節
白川村夜陰につらら落す音
どぶろくに白川の夜を更しけり
炬燵して飛驒鱒談義一頻り
どぶろくに酔ふて凭れる煤柱
春駒の昨日廻りし村に泊つ
もてなしに正月舞ひの擦りささら
しづり雪躰びたりと止みにけり
屋台倉に屋台眠らせ積もる雪

高山の雪降る街の消火栓
初商円空さんのまがひもの
雪払ふ音のぶるぶる陣屋前
奥飛騨の木々に張り付く雪の音
除雪車のそのけそのけお通りだい
笑ひ初め円空さんのナタバツリ
雪吊りて陣屋等伯ぶりの松
雪積んで陣屋米蔵ねずこ葺
お白州の格子窓より雪明り
責台と抱石四枚凍て白州
かさこそと陣屋の高張打てる雪
凍む木ボクにちよんと目鼻の木っ端佛
円空の二寸に足らぬ凍み佛
藟れいの実のあらむかぎりを鶉漁る
えんぴつで海牛つつく冬渚
冬麗の石蓴浄土を踏みゆけり
どんど焚く中でも松の爆ぜる音
次なるは「帆掛」でござい梯子乗
梯子乗富士へ乗り出す膝八艘
臨濟宗 建長寺派 円応寺 閻魔詣
道服のだぶだぶ閻魔詣でけり
転読のこゑは肝より初閻魔
かいつぶり素潜り芸の荒削り
北鎌倉氷つついて歩きけり
滝なす蔓中に一つの烏瓜
山蔭に村の手作りスケート場
煮凝の頭の方を吾に呉るる
満目の霜に一步を踏み出せる
大寒の蛇口の水のすとすと
自生して太平洋に向く椿
睦月に逝き世の寸法に合はぬ人

馬頭尊春は名のみ野辺の風
くつくつと鴨も寒さを諾へり
出し抜けに「雪やいっぽんつけとくれ」
どぶろくの上澄み雪は夜に入りて
先づは斑むちやがて庭面を覆ふ雪
雪このまま積もれば音をあぐ庭の木々
雪降りりくつがへらんとする鯉に
雪大降り小降り何処まで読んだっけ
ひたすらに落ち来る雪ともつるゝ雪
本降りと教へられけりけさの雪
磯馴松雪がくつつき始めけり
雪搔きの真似事する子裏通り
氷割れ現る水の生々し
初雪のそれがこんなに降ろうとは
昼過ぎて雪は本腰入れにけり
降り甲斐のある雪巨いなる松に
南天は雪に負ける木払ひやる
向う三軒睦まじげなる雪雫
腸はらわたが古びん昼の雪ちらちら
雪雫光を光追ふ如く
難題をもたらせるごと宵の雪
急がねばならぬ暮雪の降りやうや
雪だるま雪につつまれまたあした
夜に入りて雪はしぶとさ見せにけり
くらがりに変貌を遂ぐ夜の飛雪
職引いて雑炊好きな母のそば
寒鯉を封づ氷の曇りけり
悼みごと重ねて睦月如月と
昼は雑炊夜はシチューに風邪寄せず
鬼は外はつきり言おうはつきりと

風に張る氷紫ならんとす
小競り合ひしながら春の雪落ち来
春立てる空に鬩のあるごとし
東京湾いちめんに雪ぶちまけて
昼の雪ますます粗くなり
にけり
即吟派遅吟派梅を探らんと
大雪に竹たぢたぢとなり
にけり
バラ枯れて玉簪を遺しけり
立春の半島へ発つ踊子号
梅ふむむ月も半ばのこゑきけば
金盞花挙げて畑土代赭いろ
金盞花砂の目潰し喰ひけり
梅見客熱海の見番うち過ぎて
お涅槃の日の青空を鳶ながす
建長寺ご坊雲集お涅槃会
涅槃会の沓音巡る御仏殿
涅槃会の腹の底より楞嚴神呪
りょうごんしゅう
山内の冴ゆる日に干す僧のもの
紅梅の蒼ぼこぼこ鉛筆描
常磐木の青勝る日の涅槃講
さんしゅゆの古木ぐらつく涅槃吹
パンジーを植ゑる陽気となり
にけり
庭の土瘦せて董のいぢけ咲き
お節句に間に合ふやうに桃の咲く
内裏雛目の付くところに骨董屋
雛壇に享保男雛のしゃちこぼる
雛飾る日より日差しのやはらぎて
独りごちつゝ置きゆける雛道具
玄閨に飾られ小物雛ばかり
雛見つむ雛より細き目つきして

八十路の母はこべら提げて立話
さんしゅゆの炒り卵咲き朝の日に
桃の花噂話に終止して
郷土史家愉しむ桃の源平咲き
納税期鴨は汽水に遊びをり
風少し吹いて真鴨のよろけ縞
若駒^{蕪村展}が跳ねて蕪村の南蘋画
銀屏に蕪村の打てる凍み米点^{べいてん}
春や春蕪村の武陵桃源圖
走り根にも瘤もつ櫻春近し
恋猫にうって変はれる日も近し
首筋を吹かれて恋の猫となる
あひびきのわが世とばかり恋の猫
既にして接骨木の芽の出臍程
白木蓮すつくと晴夜疑はず
一花だに咲きためらへる辛夷無し
花辛夷風納まって物足らず
青空に辛夷ととんび大揺れに
いい加減咲いて辛夷の花散らす
亀鳴くに間ある古池巡りけり
大空のもとの祭典犬ふぐり
犬ふぐり一寸離れて牛はこべ
雨闇に紛れ降るなり入彼岸
露^妻を先づ湯搔いて春の水仕事
貴人^{あてびと}のごとく箸付け蒸鯉
パンジーの好みの彩の固め植え
水くびれひろがり流れ芹の森
足許を先づは築きて田芹摘
芹摘む婆一つ大きく伸びをして
萍のあはひあはひの漆闇

やっどこさ地べたを出でて破れ傘
破れ傘生ふ裏山の道愛す
木五倍子咲く時分の山と分入りぬ
花木五倍子簪に似て「よーいやさ」
これも咲く裡かと見上ぐ花きぶし
二輪草暗緑浄土広がり
この谿の落葉に肥ゆる二輪草
このところ霞む記憶と山茱萸と
涅槃図に坐り直して魅入る人
大風のドンと家搏ち春一途
蠅生る家居ばかりになまる身に
本伏せて蟻のゐさうな庭に出づ
夕冷えの白木蓮に翅音絶え
月浴びて夜叉のはくれん突っ立てる
夜気帯びてはくれん百羽発たんとす
月交え白木蓮の夜の宴
継ぎはぎのその日暮しや諸葛菜
面白うなりて社の万よろずの芽
芹摘める二人話の届く距離
春の雷先づは太鼓の小手しらべ
蠅の子の飛距離まだまだ知れたもの